



Members

- prof. Aya Kubota
- assistant prof. Takefumi Kurose
- visiting researcher Akiko Tanaka
- D3 Kosuke Kambara
- M2 Kaiji Douki
- M1 Akiho Hano
- Akinobu Masumura

大槌プロジェクトの取り組み

東日本大震災後、都市デザイン研究室では東大海洋研のあった大槌町赤浜で集落の被災状況等に関する調査活動を開始。2011年度は、町の文化資源を調査・整理し、まちの記憶を掘り起こし、2012年度はより詳細に震災前の生活風景を知るためにヒアリング等を行い、加えて震災時の避難行動の調査を行った。2013年度は復興計画の策定に伴い必要となる空間提案に関する調査・分析を行った。2014年度はこれまでの調査による知見を多くの人と共有しながら、計画を実行する段階に至った大槌で、亡くなった方と街や人との関係性や空間の変化の記録を行った。

2014年度の活動

- 7月 コモンズ空間調査、盛り土直前の赤浜集落の写真記録、田老等三陸沿岸集落の見学
- 8月 コモンズ空間調査の成果発表、赤浜の今昔写真展、「スタバが赤浜にやってくる！」開催、三陸沿岸集落調査
- 8月、11月～1月 生きた証プロジェクト
- 2月 紀伊半島調査

避難行動調査、コモンズ空間調査のまとめ



これまで続けてきた赤浜集落の過去の生活やコモンズ空間の変遷をまとめ、小冊子「赤浜今昔の読み解き」を作成した。次第に空間が広がっていき、山や海との関わりが減っていった様子を地図と写真で示した。

また、過去の避難行動調査、コモンズ空間調査を踏まえて、日常生活と避難計画、被災時の実態の関係を明らかにし、論文として投稿した。



神原康介、窪田亜矢、黒瀬武史、萩原拓也、田中暁子 (2014.7) 『東日本大震災時における高齢者の緊急避難行動の実態と集落環境による影響—リアス式海岸沿い集落・赤浜のケーススタディー』日本建築学会計画系論文集 701号、pp.1593-1602

神原康介、窪田亜矢、黒瀬武史、田中暁子、道喜開視 (投稿中) 『大槌町赤浜集落の避難拠点の実態と日常・防災拠点の変遷—日常生活と緊急避難期から避難生活期までの各期間に着目して—』

地域への還元



▲ 集落の変遷を記した地図を前にお話を伺う



▲ 震災前、直後、現在の同じ場所の写真に見入る

お盆の間は大槌の外に住んでいる家族も赤浜に集まり、1日に何度もお墓参りをする。その地域の盆踊りに合わせてスターバックスさんの協力を得て、コーヒーを振る舞っていただいた。

合わせて小冊子「赤浜今昔の読み解き」の配布とパネルの展示を行い、普段は赤浜にいらっしやらない方にも調査の成果を見ていただき、お話を伺うことができた。

変化を記録する



◀ 震災前や震災直後の写真と同じアングルで撮影



◀ 震災直後の赤浜



▶ 2014年7月の赤浜この直後から嵩上げ工事が始まった

嵩上げと切土の工事が始まり、大槌の地形は大きく形を変え始めた。工事前の赤浜集落の風景を写真として記録した。

生きた証プロジェクト

東日本大震災で亡くなった方の人となりや家族や友人に何い、後世に伝えることを目的とした「生きた証プロジェクト」が2014年度から大槌町で始まった。都市デザイン研究室では赤浜集落を担当し、地元の方の協力を得ながらお話を伺っている。

人により話すことへの抵抗も異なり、聞きづらい場合もあるが、震災前の集落の様子や亡くなった状況を伺うことも多く、都市デザインが果たすべき役割について考えさせられる。

他の津波常襲地域を観察する



▲ 防潮堤から被災した市街地を見下ろす



▲ 和歌山で避難動線を辿る

昨年度に引き続き、これまで大槌PJを通して得た視点をもって、他の津波常襲地域を見学する取り組みを行った。三陸沿岸の他の被災地や和歌山県沿岸地域を見学した。

2015年度の活動

2015年度は引き続き、生きた証プロジェクトと変化の記録を続ける。また、三陸沿岸集落調査や紀伊半島調査での結果のまとめを行い、東日本大震災からの復興の評価や津波常襲地域の都市デザインのあり方について議論を続けたい。

連絡先：羽野 (hano@ud.t.u-tokyo.ac.jp)
益邑 (masumura@td.t.u-tokyo.ac.jp)